前田慧雲の漢学塾修学時代

——学問・思想形成過程をめぐる一考察——

龍溪章雄

はじめに

前田慧雲（以下、慧雲と称する）の自叙伝とも言うべき回想録「余の履歴」には、十一歳頃に始まり十七、八歳頃に至るまでのおよそ七年間の漢学塾修学歴が綴られている。その記事をとおして、幾人かの儒者に師事し経史・詩文の勉学習得に励んだことが知られる。

近世において漢学はすべての学問の基礎であった。武士は勿論のこと、医師もその多くは漢学修学から専門医学に進んでいる。同様にこの時代の僧侶は一般に初め地元の漢学塾等で漢学的素養を身に付け、その基礎教養、基礎学力を得た後に専門の宗学を学ぶため遠方の師を訪ねてその学寮私塾に、或いは本山学林に遊学した。

慧雲の漢学塾修学歴も、そうした同時代に共通して見られる僧家子弟の修学状況、被教育体験の一端を物語っているように思われる。小論では、漢学塾修学時代の慧雲の履歴行実を追跡し、自己形成、学問・思想形成の土壌を探ってみたい。(1)

一　在郷時代―桑原行と岡雄左衛門―

慧雲は十一歳（慶応三年〈一八六七〉）の頃、地元桑名城下宮通の医師桑原行の下に通学し、詩経、書経の音読を習い、傍ら詩作を習った。続いて十二歳（明治元年〈一八六八〉）の時には、桑名藩岡雄左衛門の塾に通学する。ここでは左伝、国語、史記、漢書等の歴史を読み、傍ら論語、小学等の経書の講義を聞き、また輪読をし、詩文を習っている。(2)

桑原行、岡雄左衛門ともに如何なる経歴の持ち主なのか詳らかでない。前者は私塾であったのか文字通りの個人指導であったのか不明である。しかし、教授内容が詩経・書経の素読というから、学習レベルとしては叔父祐乗の覚照寺時代（八～九歳）(3)同様、まだ基礎的入門的な段階であったようだ。但し詩作の学習を始めているから、学力にも進歩が見られたのであろう。

しかし後者の岡塾通学時代になると、史書の読書（自読）の他に経書の講義を聴講し、塾生による輪読にも参加している。当時の漢学修学課程では一般に四書五経の素読（句読）を入門課程とし、自読（独読・復読・温習とも）・輪読、講義、輪講（会講）、文章（漢文による作文、詩文の研鑽）と順次グレードアップしていく。(4)十二歳時点で、少なくとも素読の入門課程は既に卒えていたと思われる。詳細は不明ながら慧雲が通っていた漢学塾では、ある程度高水準のカリキュラムに基づいた本格的な教育を施していたことが推察される。

二　掇英園時代―大賀賢勵（旭川）―

「余の履歴」を読むと、十四歳（明治三年〈一八七〇〉）から十六歳（明治五年〈一八七二〉）にかけてのおよそ

二年間は、慧雲の漢学塾修学時代の中でもとりわけ重要な意味を持っているように思われる。この時期、慧雲の漢学修学は一段と進歩を見せ、大きな感化を受けて生涯「先生」と仰ぎその学恩を感謝し続けることとなる最初の師との出会いがあった。十四歳から十六歳に至る二年間の経歴を、「余の履歴」の原文に拠って紹介しよう。

十四歳の春、叔母粂女の嫁せし中上村遍崇寺の世話にて朝明郡東大鐘村浄圓寺（大谷派）前住の大賀賢勵（号旭川）先生の塾に入りしが、幾ばくもなく先生は忍藩の聘に応じて大矢知村代官所の学校の学頭となりて同校（興譲館）へ移られたれば、余も他の塾生と共に同校内へ移宿して日々先生の講義を聴き、詩文等を練習せり。

翌年、同校改革あり。余は句読の教授などを手伝へり。此際先生に請ふて易経の講義をきゝ、一層勉強したりしが、余の哲学的理解力は此時稍発達したる様に自覚せり。

翌年十六歳の時、大矢知の興譲館は廃せられしが、教導職の試検施行に付一般僧侶の狼狽一方ならず。之が為めに桑名の大谷派本統寺に於て学仏場と称する僧侶の学校的のもの開設せられ、先生を招聘して講師となしたりしが、余も亦先生の嘱託によりて同場の句読教師をなしたり。後、英学の必要を感じて試に英学を習ひたれども、良教師なければ遂に又之を廃したり。(5)

右回想に基づき、この時期の修学歴を年譜風に再構成すれば以下のとおりである。

(1) 明治三年（一八七〇）、十四歳、大賀賢勵（旭川）の私塾に入門する。
(2) 同年、師賢勵の興譲館学頭就任に伴い同館に移宿する。
(3) 明治四年（一八七一）、十五歳、興譲館改革に伴い句読の教授を手伝う。
(4) 同年、大賀賢勵に易経の講義を受ける。

(5)　明治五年（一八七二）、十六歳、地元桑名本統寺（大谷派）に開設された学仏場で、講師大賀賢勵の嘱託により句読教師を務める。

(6)　同年、英学の学習を試みるも中絶する。

(1)は、大賀賢勵（旭川）の私塾時代で、正しく漢学塾修学時代に属する。これに対して(2)(3)(4)の行実の場である興譲館は、正確には漢学塾ではなく、また新たに学びの場として選んだ理由も、同館での修学そのものが慧雲の目的ではなかった。あくまでも師賢勵の下での修学継続を望んでの選択であった。換言すれば、慧雲（及び他の塾生達）にとって興譲館は、旭川塾の延長としての意義をもった学舎であった。そのことは先の所引文面からも容易に推察出来よう。その意味において(1)と同様に、この興譲館時代もまた慧雲の漢学修学過程における重要な時期に属する。なお、(5)(6)はいわゆる漢学塾での修学体験とは異なる行実であるが、句読教師を務める、英学の学習を試みるなど当時の慧雲の修学状況、修学関心の一端を垣間見ることが出来て大変興味深い。この点についても、別途触れてみたい。

以下、順次、慧雲の回想に考証を加えつつ、可能な限り各修学歴の実態と意義を解明してみたい。今章では、旭川塾時代を扱う。

大賀賢勵は号を旭川と言う。「余の履歴」にもあるように、伊勢国朝明郡東大鐘村（現三重県四日市市大鐘町）浄圓寺（大谷派）の住職でもあった人物で、代表的近世（～近代）儒僧の一人である。文政二年（一八一九）同寺の長男として誕生、二十五歳（天保十四年〈一八四三〉）にして豊後国に遊学、日田の広瀬淡窓[6]の私塾咸宜園で四年間修学した。賢勵在塾当時は咸宜園の全盛期に当たる。その後江戸に出て更に勉学、帰国後自坊に私塾を開設し後進を指導した。四十四歳の時（文久二年〈一八六二〉）、浄圓寺住職を継ぐ[7]。著書に、『皇佛漢洋四学問答』（明治

二十六年十一月発行)、『旭川詩鈔』等がある。明治三十九年(一九〇六)、八十八歳で没。[8]

十四歳の慧雲はたまたま親戚の紹介で、近世最大の私塾として著名な咸宜園に学んだ淡窓門下の大賀賢勵(当時五十二歳)に師事する縁に恵まれた。旭川は詩文に秀で、慧雲も漢籍の研鑽だけでなく詩文の面でもその影響を受けており、とりわけ詩文については添削指導を受けること後年にまで及んでいる。慧雲にとって「旭川先生」[9]は生涯の師と仰ぐ最初の人物であった。

ところで大賀賢勵が開設した私塾に関して、慧雲は在塾時代の先輩塾生の詩集に添えた序文の中で塾名を「掇英園」と呼んでいる。

清水君敬止。伊勢人。曾学旭川先生於掇英園。予之先進也。(中略)明治中興之後。藩侯設興譲学館於大矢知村。敬止擢為教授。及館與藩廃。奉職郡衙。(下略)[10]

また『三重県教育史第一巻』「県内寺子屋・私塾一覧表」に拠れば、

(町村名)朝明郡　東大鐘村
(開業・教授年代)嘉永年間～明治4年
(塾主及び師匠/身分、氏名)僧、大賀賢勵
(教授科目)支那学[11]

と出ているが、塾名は記されていない。同書は大賀賢勵について、

(上略)明治期に「半学舎」を開設して、子弟の教育に当たり、その数は二二か国一、〇〇〇人余に及んだという。[12]

と紹介している。

更に、慧雲と同郷同期の塾生であった松原深諦[13]の前田慧雲追悼文「前田博士の思ひ出」は、次のように証言する。

旭川塾は後に名が変つて吾々の居た時代は綴英園と呼んで居た。[14]

以上のことから、慧雲の在塾当時は「掇英園」（嘉永年間開設）と呼ばれていたこと、[15]また後述するように大賀賢勵が明治三年興譲館に学頭として招聘されることとなって移住した（興譲館在職期間は明治三年～五年）ため一旦掇英園は閉塾され、その後同館廃止（明治五年二月）に伴い再開、この時の塾名が「半学舎」であったことが知られる。

先の松原深諦の前田追悼文では掇英園時代の回想が詳しく語られていて、当時の旭川塾の規模、慧雲の修学と生活の一端を窺い知ることが出来る。ここでは暫くその証言に拠って掇英園時代の塾生慧雲の横顔を垣間見ることとする。

故博士や拙老の旭川塾に居た頃は明治の初年で、お互に腕白盛りの時であつたが、塾は西寮、東寮の二棟に分れ不完全なもので通学生も寄宿生も居合せて、五十余名のものが真に雑然と起居して起臥飲食共に同室で行ひ、或は教室となつたり、自修室となつたり誠に簡単なものであつた。然し学生としての階級や区別は出来て居て、四書、五経、文選等の素読のみをなすものと講釈を聴く者と、講釈の中にも経と史の二科に分れ、一日は論孟五経等経学の講義を聴けば、一日は十八史略左伝等の史学の講義を聴くと云つた風に区別が立つてゐた。その他日々輪講と云つて学生のみが十数名円座を作り、一番の籤を引いたものが講義を初め、その者が行き詰ると其の次の席に居る者が其の後を引受ける、かくして次々に講義を持ち回ることがあつた（下略）[16]

慧雲在塾当時の掇英園には東西二寮の建物があって、寄宿生はここで寝食を共にし、また自習するなど学業に励

んでいた。食堂や教室をも兼ねていたというから、私塾の設備としては決して十分なものではなかったようである。塾生の中には寄宿生だけでなく通学生も含まれ、五十名余りの塾生が当時掇英園に学んでいたことが分かる。慧雲は寄宿生であった。

松原に拠れば寄宿生の夜学自習の様子は次のようであった。東西二寮はいづれも室内の一方が中敷居になっていて、夜間はその中敷居に三尺間ごとに一人一個の小行燈を掛け種油に燈心一本位を入れて火を点じ、机を其の前に並べて八人或いは十人が横一列に座して勉強した。読書をする者、詩を作る者、字引を片手に考える者等、思い思いの勉強振りはまことに熱心で夜の十時頃まで勉強したという。[17] 恐らく十時が就寝時刻であったのであろう。

設備は完備していなかったけれど、教育課程の方はある程度具備していたようである。四書五経等の素読、経書・史書の講義、輪講はいずれも当時の私塾に共通して見られる学科階梯であった。

掇英園の規模、教育内容、塾生の修学状況はほぼ以上のとおりであるが、慧雲自身はそうした環境の中で如何なる学園生活を送っていたのであろうか。当時の塾生慧雲の学業レベルはどの程度であったのか。この点に関しても松原の回想は極めて有益な情報を提供してくれている。

> （上略）輪講が前田氏に当ると前田氏は行詰まる所の騒ぎではなく、その時分から例の調子の落ついた言葉で、ぽつりポツリとやりながら講釈を誤つたことは無く、何処迄行つても行詰まることがないので大賀先生も外の者に気の毒とでも思ふのか前田さんもう結構です、隣へ譲つてやりなさいと云はれて漸く隣生へ譲るといつた調子で、弁才はなかつたが学才は慥に群を抜いてゐた。[18]

この時代の慧雲の学力を窺い知ることの出来る唯一の証言である。先に見た岡雄左衛門塾通学時代（十二歳）には既に素読の入門課程は修了しており、修学階梯としては一等上の輪読、経書講義の聴講の段階にまで進んでい

た。今この掇英園では更に上級の輪講課程を履修しているから、当時の慧雲は随分と学力が向上していたことが知られよう。その学力の程度について松原は、「如何なる白文の漢文を見せても立所に読み下して解釈を下すといふ実力を持つて居た」[19]と述べている。しかも輪講の時間、慧雲の講釈が「何処迄行つても行詰まることがない」ため次の番の塾生に交代するよう大賀先生に促されるほどで、その「学才は慥に群を抜いてゐた」という。

そうした慧雲の「群を抜い」た学力は詩作の面でも発揮されていたようである。旭川先生から出された課題を見るや否や、他の塾生等が一生懸命考え込んでいるのとは対照的に慧雲だけは「グルリと横になつて目を閉じてしまふ」、学友から「おい前田詩は出来たのか」と訊かれると、「うん、もうとつくに出来たよ」と言ってすらすらと書きあげる、しかも先生に褒められること常であったという[20]。後年の慧雲からすれば当時はまだ習作時代に属するが、既にこの頃から漢詩文は得意分野だったのであろう[21]。

ともあれ掇英園時代の慧雲は、経書史書等の漢籍、詩文ともに他の塾生から一目置かれるほどの学力の持ち主であったようだ。では在園生活はどのようなものであったか。この点について松原の追悼文は興味深い前田慧雲像を提供してくれている。

当時慧雲は用事のない時はすぐ横になってしまうので学友達からは「豚」という綽名で呼ばれていた。「前田博士は旭川塾に居る頃は、何時もゴロリと横になつて人が豚と仇名する程無頓着の変わり者であつた」[22]という。そして、その「無頓着の変わり者」の横顔を次のように回想している。

（上略）四ツ時（今の十時頃）まで勉強したものであつたが、前田博士は例に依つてゴロリと横になつて瞑目して黙つて居るばかりで、たまに月夜等の時に外へ散歩に出る事もあつたが大抵は横になつて居た。そして其の言ふことが誠に面白い。

「僕は掛行燈がないから夜は昼の間に見た書物を腹で読んで居るのだ。」と済まして居るから、同僚は明いた口が塞がらぬ始末であつた。(23)

抜群の学力は一般に普段の勉学研鑽における血の滲むような努力精進に由来するものであるが、少なくとも松原の紹介する慧雲像からはそのような刻苦勉励、彫心鏤骨の姿は余り想像出来ず、むしろ逆にその「学才」は生来のものとさえ言えるような印象を与える。この点に関して松原自身、

正しく博士は「過去已曾習修斯法」の金言の如く、一世の人では無く全く前世からの宿因を持つて居た人に相違なからう。(24)

とも述べている。追悼文特有のいわゆる追憶讃仰の要素を差し引いて考えるとしても、慧雲より五歳年長の松原をしてかく言わしめるほど慧雲の学力は「傑に群を抜いてゐた」のであろう。とは言え、やはり他の塾生達と同じく苦学生活を送り迎えしていたことは間違いない。後年の慧雲の人となりを松原は、

思へば博士は無欲恬淡、何事にも不平不満といふものは持たなかつた人である。是も一に旭川門塾で自炊苦学から来た賜であらうか。(25)

と述べ、その由来を自身も経験した「自炊苦学」に求めている。

掇英園時代の「自炊苦学」の実態の断面を、次のように松原は追懐する。

其の頃は学僕も炊夫も無く「君水を汲め僕は飯を炊く」と言つた所謂薪水労を分つ自炊生活で、副食物なら赤味噌と漬物一式、稀に時の野菜（芋、大根、豆腐）等を煮ることもあつたが、全体に於て粗餐粗食赤貧洗ふが如き生活其儘でお互に苦学を重ねたもので、恐らく今の学生諸君の思ひもつかぬことのみで苦労もあつたが亦面白味も其中に味ふことが出来た。(26)

後年慧雲も、松原の還暦（大正元年）を祝って詠んだ七絶詩で、

聞公固甲忽相疑。試撫吾頭髪若絲。薪水分労如昨日。匆々三十五年移。(27)

と、「薪水労を分つ」体の自炊苦学生活の当時を感慨深く想起している。この「薪水分労」の「粗餐粗食赤貧洗ふが如き生活」については、広瀬淡窓の咸宜園を彷彿とさせるものがある。(28)恐らくは慧雲等の師旭川自身が淡窓門下時代に経験した私塾生活が掬英園の範とされていたのであろう。

また、先の「僕は掛行燈がないから夜は昼の間に見た書物を腹で読んで居るのだ。」と語り、他の塾生が呆れて物も言えなかったというエピソードも、裏を返せば、当時慧雲には夜学自習に必要不可欠な自前の「掛行燈」を用意する金銭的余裕さえなかったということであろう。それだけに学友達の気が付かないところで人一倍苦労しつつ勉学に励んでいたものと想像される。

三　興譲館時代―大賀賢勵（旭川）―

明治三年（一八七〇）、慧雲の掬英園入塾後間もなく同年の内に、師賢勵は忍藩に招かれて興譲館学頭に就任し同校に移った。これに伴い、慧雲等塾生達もまた師の赴任先に転住することとなる。大賀賢勵を師と慕う塾生の多くが師と行を共にしたのであろう。師を欠く掬英園はやがて閉じられた。(29)

慧雲等掬英園塾生が師に伴い転校した先の興譲館は、明治三年十一月、忍藩(30)の藩政改革に伴い新たに朝明郡大矢知村（現四日市市）に藩内人民を対象として設立された藩立学校である。明治元年から、明治政府による近代教育制度としての学校政策の起点となった同五年八月の「学制」頒布までの時期は、藩による藩学校の改革、一般民衆を対象とした読み書き算術等を学ぶ寺子屋、庶民の西洋学摂取を目的とする外国語塾など多様な学校・教育の試み

が行われ、また明治四年の廃藩置県による県の設置に伴い各地で県学校が設立された時期でもある。興譲館はそうした維新期における近代教育への過渡期の動向の中で設立されたものである。四書五経等漢籍に拠る儒学教育を基本としつつも、一方で「学問ノ要領ハ綱常彝倫ノ大義ヲ知テ之ヲ実ニ務ムルニ在リ」（掲示諸生）とする立場から国学を奨励し、農工商人子弟の学問教育（洋学による知識の習得、実学）を必要視するなど、当時の明治政府の理念（神道国教化政策による民衆統合、啓蒙的開化主義による実学の奨励）を踏まえた郷学校であり、この時期の学校の特徴をよく示している。(31)

ところで慧雲は、「大矢知村代官所の学校」「興譲館」等と記しているが、正式な校名は「興譲堂」であった。(32)先にも指摘したとおり、慧雲の入学理由は同館での修学そのものにあったのではなく、あくまでも師賢勵の下での修学継続を望んでの選択であって、興譲館は慧雲にとって旭川塾の延長としての意義を有する学舎であった。しかし、新たな教育環境は、転校当時十四歳の慧雲に少なからず影響を与えたものと推察出来る。もっとも、興譲館時代の被教育体験について慧雲は師旭川とのこと以外何も語ってはいないから、どのような影響を受けたか詳らかではない。ここではひとまず興譲館の設立趣意、学則・制度、規模等について確認し、当時の慧雲の修学状況を垣間見る縁としたい。

興譲館の開設は明治三年十一月であった。その設立趣意は、

> 郡中村々ノ幼童八歳ヨリ入校為致句読習字算術等ノ学科規則ヲ設ケ、生徒ノ気質ニヨリ修業為致、各人道ヲ弁ヘ孝悌ヲ尽シ人倫ノ道相立候様致度候。（中略）学校盛大人才教育一際行届候様致度、左候得ハ朝廷ノ御旨趣モ貫徹致シ郡中一般ノ風儀淳朴ニ相成、村落畔争境論等自然相止ミ、各礼譲ヲ旨トシ、分限ヲ守、万事質実ニ渉リ華美ノ習染一洗致可申候（以下略）」（藩主布達）(33)

と述べられている。民衆の教化と掌握を目的として開校されたものであることが知られよう。

同年十一月、郡内の家屋が修繕されて習字・数学の二局が置かれ臨時の教場に宛がわれた。更に講堂（漢学教場・読書研鑽用）と生徒寮（寄宿生用）が新たに建築造営され、翌四年（一八七一）一月、講堂、習字・数学局（教場）が完成、二月一日開校式が挙行された。(34)

興譲館の開校は明治四年二月であるから、正式には慧雲の入学はこの時点となろう。しかし師旭川が教頭として赴任した時期は前年十一月であったと考えられ、また既にその月には生徒寮が建設されていることから、慧雲の入寮は明治三年十一月もしくは十二月、遅くとも四年一月であったこととなる。従ってまた慧雲の掇英園時代は明治三年春から同年十一月頃までとなる。

興譲館の教育内容は、先にも少し触れたが、儒学を基本としつつも国学、洋学、習字、数学（算術）等の教育を施す点に見られる。基本学科としては、「漢学（読書）」「習字」「数学（算術）」の三科があり、それぞれに専門の教員が配置されている。漢学教授方（五人）、句読師（五人）、句読師試補（七人）、習字教授（三人）、習字助教（二人）、数学教授（三人）、数学助教（三人）、この他に教頭三人、教頭試補二人、計三十三人の教員体制である。一方生徒は、「読書ノミヲ専ラトスルモノ」「習字ヲ専ト為モノ」「数学生」の三類から構成されていた。選択は生徒の自由であるが大抵は三科を兼学したという。(35) 慧雲は恐らく「読書ノミヲ専ラトスルモノ」即ち漢学専攻生であったと思われる。また修学生徒の年齢は通常十歳から十四、五歳であった。生徒には通学生と寄宿生がいたが、何れも授業料免除、ただ寄宿生のみ食費・燃料費等を納めることになっていた。生徒は入学時、机・文庫・草紙・硯・書籍・算盤等を持参、寄宿生は加えて飲食器・夜具等を持参しなければならなかった。(36) 慧雲は寄宿生であったから、当然これらの勉強道具、寮生活用品を持参したと思われるが、どの程度具備していたか不明である。ま

た生徒の該数は寄宿生が一ケ月平均三六人、通学生一五〇人であったから[37]、教員数と併せると当時の学校規模としては比較的大きな部類に入る。

さて、慧雲は漢学専攻生であったと思われるので、「教則　学則」に拠ってその修学階梯を見てみると、科目としては「講義」「会読」「輪講」「輪読」「素読」「詩文」が設けられている。講義は教頭がその任に当たり、難解書と易解書の両書を毎日一席ずつ連続講義するもの、会読は三日間講義を聴き休講日に会頭（教頭が担当）指導の下で十二、三人を一組として論議研究するもの（三講一休）、輪講は会頭（担当は教授方）指導の下で十二、三人を一列として蒙求・十八史略等の書を輪番に講ずるもの、輪読は会頭（句読師の担当）指導の下で十二、三人を一団として四書五経等の書を輪番に素読するものである。生徒の階級としては、九等を設けそれぞれに真権を分かち、権初級から真九級まで都合十八等級から構成されていて、各級にそれぞれ課題書が指定されている。五級以下を下等とし、学習内容としては初級から三級までは句読（素読）・輪読、四級以上が講義・会読・輪講である。六級以上は上等とされ、順次に難解な経書・史書の講義聴講と自読研鑽、及び詩文の作成研究である。各級いずれも賞点制に基づき、平素生徒は規定の点数を積み上げていき、毎月の試験を受けて順次昇階していくのである[38]。

慧雲が入学した際、何級から修学を始めたか詳らかではないが、旭川塾時代すでに輪講・詩文レベルに達していた点から推察すれば、五級もしくは六級あたりに配属された可能性もあろう。しかし、旭川塾と興譲館とでは、カリキュラム上の課題図書に相違があり、また興譲館の方がより高度精密なカリキュラムを組んでいると思われるから、一概にパラレルな比較は出来ない。少なくとも句読素読の階梯は卒業しているものと看做されたことは間違いない。最低でも四級以上のクラスから出発したと考えてよいであろう。慧雲は明治四年、十五歳の時、興譲館改革に伴い句読の教授を手伝ったと述べている。この時の改革内容は未詳ながら、明治四年十月制定の「定則」に拠る

と、真四級昇階までは句読師試補に、真四級の者は句読師に、五級以上の者は真六級昇階までは教授試補に、真六級の者は教授方に、とそれぞれ生徒の中から優秀な者を教員に抜擢している。慧雲の言う改革とはこのことであったと考えてよいであろう。「句読の教授」とは、初学者に「素読」を指導する「句読師」の役職を意味するであろうから、慧雲は明治四年十月以降、句読師試補もしくは句読師に抜擢されて教員の身分を得たことになる。恐らくは句読師であったかもしれない。因みに当時の句読師の俸禄は年一五両、同試補は年一〇両であった。(39) 但しこの制度に拠れば、興譲館入校時に仮に権四級とすると、九カ月後に真四級となって、慧雲にしてはいささか進級のペースが遅すぎる嫌いがある。或いは「句読の教授」とは「教授試補」のことであったか。とすれば、五級に進級したこととなろう。詳細は不明ながら、いずれにしろこれは師大賀賢勵教頭の推挙によるものであったと思われる。そしてそのことは、興譲館時代の慧雲の学力が一段と進歩したことの証左であることだけは間違いない。

上記句読教師と並んで興譲館時代のもう一つ重要な行実として、明治四年、慧雲は師賢勵に易経の講義を受けていることに注目したい。「先生に請ふて易経の講義をきゝ、一層勉強した」結果、「余の哲学的理解力は此時稍発達したる様に自覚せり。」と述懐している。大賀賢勵から受けた易経の講義は当時の慧雲にとって漢学修学上の一転機、学力の大幅な向上に役立つ重要な一契機となったように思われる。易経は言うまでもなく五経（易経、書経、詩経、礼記、春秋）の一つで、中国周代の経書である。宇宙万物の生成変化を陰陽二元の原理に基づいて説明しており、中国哲学思想の基盤を形成した書である。慧雲が自らこの経書の講義を求めたというから、この時期東洋哲学の修得に関心があったのであろうか。いずれにしても旺盛な向学心の顕われである。加えて易経は、荘子・管子・韓非子・孫子等の経書、六国史・南北史・五代史等の史書と並んで、興譲館では最高の階梯九級におけるテキスト（経書）である。(40) 正式な等級に基づく講義ではなく、任意の個人授業であったと思われるが、当時の慧雲の

学力のレベルを推測し得るエピソードとして留意すべきであろう。興譲館での修学は、しかし、明治五年（一八七二）二月、慧雲十六歳の時、同館の廃止に伴い終了した。廃藩置県によりやがて忍藩が廃止されたことが背景となっている。学舎閉鎖後も暫くは講堂で有志教員・生徒により学問は続行されたが、同七月安濃津県の懲役場になったため閉校となった(41)。

四　普通学への志向の芽生え―興譲館後の慧雲の行実―

明治五年（一八七二）、十六歳の時、地元桑名本統寺（大谷派）に開設された学仏場で、慧雲は講師大賀賢勵の嘱託により句読教師を務めた。慧雲に拠れば、この学仏場は教導職試験施行に備え、大賀賢勵を講師に招聘して開設されたものである。その開設時期、また慧雲が句読教師を務めた期間は不明である。恐らくは興譲館廃止に伴い帰寺した大賀賢勵を招いたものであろうから、開設は明治五年二月以降に属する。慧雲が師賢勵の嘱託によって句読教師を務めたのも、同時期、大矢知村興譲館から地元桑名西福寺に戻って以降のことに属する。

明治五年三月、政府は神祇省を廃止して新たに教部省を設置、続いて四月には宣教使に替わり教導職を置き、国民教化の任に当たらせることとなった（教導職制）。教導職は試験によって補任されるもので、僧侶住職は「三条教則」（敬神愛国・天理人道・皇上奉戴）を体して説教することが義務付けられた。十一月には大教院が設立され、神社・寺院は小教院として位置付けられたのである。翌六年（一八七三）二月、教部省は国民教化の要項（布教題目）として「十一兼題」を、続いて十月には「十七兼題」を制定、これに基づき教導職を試験することとなった。因みにこの年、島地黙雷等による真宗の大教院分離運動が興ったことは周知のとおりである。明治七年に入ると、教導職試補以上の資格なき者の説教が禁止され、寺院住職資格を教導職試補以上とすることが定められた。真

宗各派では「兼題」が研究され、その学習・布教用の啓蒙書が発行されるようになった。

以上の教導職制成立の経緯を参考にすると、学仏場の開設は早くて明治五年四月以降となろう。従って慧雲が師賢勵の下で句読教師を務めたのも、その時期となる。

ところで、この頃、慧雲は英学の学習を試みている。「余の履歴」には、

英学の必要を感じて試に英学を習ひたれども、良教師なければ遂に又之を廃したり。(42)

と述懐されている。その英学学習の動機については、単に「英学の必要を感じて」とあるだけで、詳細は不明である。英学の必要性を痛感させる何らかの経験が当時の慧雲にあったのであろうか。一年と数ヵ月の興譲館時代、慧雲が洋学に触れる機会はあった。同館の蔵書中に国書・漢書の他に洋書が十三種三六冊含まれていたから(43)、或いは既にその時代、漢学の勉強の合間に洋書に目を通すこともあったかも知れない。そのことがやがて英学に関心を持たせる機縁となったとも想像出来よう。ともあれ教師に恵まれずやむなく中絶するに至ったようであるが、この時期、十六歳の慧雲に、普通学への関心が芽生えていた事実は、慧雲の修学歴上注目に値する。漢学の修得による基礎教育の後に専門学問に進むというのが、当時の一般的な修学過程であったが、十六歳の慧雲にとってそれは当時の大方の寺院子弟が選択するいわゆる宗学の道ではなく、英学に代表される普通学であったことは、この後の慧雲の修学状況に何らかの影響を与えていくであろうことを予感させる。(44)

五　名古屋時代―佐藤牧山と老僧歳寒―

慧雲十七歳（明治六年〈一八七三〉）の時、名古屋鍋屋町教順寺の住職であった叔父等観が本山の役を勤め不在につき、半年ほど留守居を兼ねて同寺で生活していた。その間、旧名古屋藩（尾張藩）の学頭佐藤牧山の家塾に通

学し、易経の講義を聴き、またその一方で頼山陽晩年の門人であった老僧歳寒のもとに通学、山陽流の文章軌範の講義を聴き、詩文を添削してもらった。

佐藤牧山については西島醇『儒林源流』に、

（程朱学派）佐藤楚材　字晋用。号牧山。尾張人。明治二十四年二月十四日没。年九十一。著清朝史略。老子講義。牧山楼文鈔等。(45)

と出る。歳寒の人物像に関しては不詳である。前田の詩文集に拠れば、この後も、先の大賀賢勵同様この佐藤牧山と歳寒の二人にも詩文の添削指導を仰いでいることが知られる。(46)

易経は、既に興譲館時代に師賢勵から手ほどきを受けていたものであった。慧雲の「哲学的理解力」は更に一段と発達深化したに相違ない。また歳寒の「山陽流の文章軌範の講義」の詳細は分からないが、十一歳当時父覚了を介して頼山陽の影響を受けていたから、或いは山陽門人との情報を得て師事したのかも知れない。

むすび

ここまで慧雲の漢学塾修学状況を見て来たのであるが、慧雲の学力は客観的にはどの程度であっただろうか。そのことを知るために、いま試みに広瀬淡窓（咸宜園）の「迂言の学制」に出る指摘を参考にしてみたい。即ちそこには、

素読より文章の稽古まで、十一二歳より学びて、速かなるは五六年、晩きは八九年、大抵二十歳より内に修行成就すべし。(47)

とある。

咸宜園における修学の階梯は、次のとおりである。

素読（四書、五経、小学など。誦読滞ることなければ上等）→輪読（左伝、史記などの未授書を輪次を以て読む。音声朗暢にして句読誤り無ければ輪読の上等）、傍らに講義（講釈）を聴く→輪講（経史の類を列座して輪次に講じ、言語明白にして義理通達せば輪講の上等）→文章（漢文による作文）→経義の研究・詩文の学習

そして一般には、素読～文章までで一応終了する。年齢は、十歳もしくは十一、二歳から学び始めて進歩の速い者で五、六年、遅い者で八、九年、大抵二十歳までには修学成就すべきである。素読～文章までを修了した後は、各人の希望、志に従い、経義を研究し、詩文を学び、あるいは和学・蠻学など、各その師に従い研鑽していくべきである、とされた。(48)

また教授体制は、素読の教授指導は、輪講生・輪読生に担当させ、輪読の指導監督は、文章生・輪講生に担当させる。輪講の指導監督と文章の実習指導は教官みずからこれに当たる。(49)

慧雲は、十五歳（明治四年）の時、興譲館修学時代、句読の教授を手伝い、また十六歳（明治五年）の時、学仏場で大賀賢勵の嘱託により句読教師に抜擢された。これは、慧雲の学力の進歩が速く、十五歳の時にはすでに素読生に素読の指導を行うまでになっていたことを物語っている。自らも「一層勉学に励み学力も向上した」「余の哲学的理解力は此時稍発達したる様に自覚せり。」（「余の履歴」）と、十五歳当時の刻苦勉励の修学体験を述懐している。十四歳から十六歳にかけての約二年間、大賀旭川門下時代（掇英園・興譲館修学時代）は、慧雲の漢学塾修学時代の中でも最も充実した時期であったと言えよう。すでに十二歳の時、岡雄左衛門の私塾時代に輪読に参加しており、先に見た松原の回想文に拠れば掇英園修学当時には少なくとも輪講生のレベルにあったことは間違いない。十六歳の時、「英学の必要を感じて試みに英学を習っている」点より推すれば、すでに十六歳当時、素読～文

章までの階梯（課程）をひととおり修了していた可能性も大きい。詩文を早くより習い始め、旭川門下時代にも師旭川の指導を仰いでその習練を重ねている点からも、慧雲の学力が人並み以上のレベルにあったことは確かなことであろう。とすれば、慧雲の漢学塾修学は十一歳に始まっているから、「年齢は、十歳もしくは十一、二歳から学び始めて進歩の速い者で五、六年、遅い者で八、九年、大抵二十歳までには修学成就すべし」との広瀬淡窓の漢学塾修業年限に関する指摘に照らしても、慧雲の基礎学力修得レベルは「進歩の速い」部類に属するものと考えて間違いないであろう。

註

（1）本稿は『真宗学』第一一七号の続篇である。

（2）以上、「余の履歴」（『前田慧雲全集月報』第六号）参照。

（3）『真宗学』第一一七号参照。

（4）海原徹『近世私塾の研究』三九頁参照。

（5）「余の履歴」。註原文。

（6）名建。字子基。号苓陽、淡窓。安政三年十一月一日没。七十五歳。著書に、読論語、読孟子、夜雨寮筆記、遠思楼詩集他。以上、西島醇『儒林源流』一八一頁。淡窓の人物像の詳細については『淡窓全集』（三巻）初め参考文献多々あるも、取り敢えず竹林貫一編『漢学者伝記集成』一一八～一一二頁参照。因みに広瀬淡窓は亀井昭陽門下で、学系としては復古学派に属する。

（7）因みに、住職を後嗣賢海に譲った時期は未詳。明治二十五年〈一八九二〉（賢勵七十四歳）当時、浄圓寺住職は既に嗣子賢海の代に替わっている。『寺院明細録』上巻（四二頁）に、浄圓寺の住職氏名欄に「大賀賢海」と出る。

（8）以上、大賀賢勵の経歴に関しては、近藤壽太郎『広瀬淡窓先生と大賀旭川先生の教育』、近藤壽太郎『大賀旭川先生と半学舎』、中島市三郎『咸宜園教育発達史』、三重県総合教育センター編『三重県教育史第一巻』、三重郡教育会編『三重県三重郡誌』、『角川日本地名大辞典24　三重県』等を参照したが、適宜私に補訂した。

（9）「梅荘詩鈔序」明治四十三年三月作、五十四歳、東洋大学長時代。「梅溪遺稿序」明治四十年代～大正初年頃の作。いずれも『止舟齋焚残文稿鈔』全集8、八二～八三頁。
（10）「梅荘詩鈔序」『止舟齋焚残文稿鈔』全集8、八二頁。
（11）『三重県教育史第一巻』「県内寺子屋・私塾一覧表」一一九四頁。
（12）『三重県教育史第一巻』二六四頁。
（13）嘉永五年〈一八五二〉～昭和六年〈一九三一〉。伊勢桑名郡深谷安養寺（本願寺派）に生まれ、明治八年員弁郡梅戸井光明寺に入寺、住職となる。本山の執行を三回、執行長を二回務め、宗門行政に貢献。昭和六年十二月二十二日没、八十歳。以上、井上哲雄『真宗本派学僧逸伝』一五七頁参照。
（14）松原深諦「前田博士の思ひ出」『前田慧雲師語録』五九五頁。
（15）松原深諦の文には「綴英園」と出るも、慧雲の「掇英園」の方が正しい旭川塾の名称であったと思われる。恐らく誤植であろう。因みに、「綴」は「テイ」（漢）「テツ」（慣）、「掇」は「テツ」と読む。「綴」は「つづる」「つなぎ合わせる」「糸でとじる」「とどめる」の意。「掇」は「ひろう」「とる」の意。「掇英園」（テツエイエン）とは、英才を拾い取る私塾、英才を集めて教育する学園の意カ。
（16）「前田博士の思ひ出」『前田慧雲師語録』五九三頁。
（17）同前、五九五頁。
（18）同前、五九三～五九四頁。
（19）同前、五九四頁。
（20）同前。
（21）終生詩文を好み多くの作品を遺している前田の文人墨客としての横顔は、現時点で実証することは不可能ながら、先の桑原行と岡雄左衛門両師の下での基礎修学時代を経て、この大賀旭川門下掇英園時代にその原像が生成されたのではなかろうか。
（22）「前田博士の思ひ出」『前田慧雲師語録』五九五頁。
（23）同前。註原文。
（24）同前、五九四頁。

(25) 同前、五九八頁。
(26) 同前、五九四頁。
(27) 同前、五九五頁。
(28) 中島市三郎『咸宜園教育発達史』一五五～一六八頁参照。
(29) 閉塾は「明治四年」。註(11)に同じ。
(30) 忍藩は武蔵国忍藩のこと。大矢知村は同藩の領地。同村内に忍藩陣屋（前田が言う代官所）があったが、明治九年の伊勢暴動で焼失。跡地は現在大矢知興譲小学校の敷地になっている。『角川日本地名大辞典24　三重県』二七一頁。
(31) 以上、『四日市市史第十三巻』三頁参照。
(32) 「旧忍藩領朝明郡大矢知村学校」『日本教育史資料第三巻』所収、『四日市市史第十三巻』四頁。因みに、『三重県教育史第一巻』では「興譲学校」（二六一頁）、『角川日本地名大辞典24　三重県』では「興譲館」（二七一頁）。いまは仮に慧雲の呼称「興譲館」を使う。
(33) 註(32)に同じ。
(34) 「旧忍藩領朝明郡大矢知村学校」『日本教育史資料第三巻』所収、『四日市市史第十三巻』四～五頁。『三重県教育史第一巻』二六一頁。
(35) 同前、七頁、一一頁。
(36) 同前、一一頁。
(37) 同前、一一頁。この他、寄宿生対象の「寮規」が定められている（九～一〇頁）。
(38) 同前、五～七頁。
(39) 同前、一一頁。
(40) 同前、六頁。
(41) 『三重県教育史第一巻』二六四頁。
(42) 「余の履歴」。
(43) 「旧忍藩領朝明郡大矢知村学校」『日本教育史資料第三巻』所収、『四日市市史第十三巻』一二頁、『三重県教育史第一巻』二六四頁。

（44）慧雲の作文「愛竹説」（『天琴余響鈔』所収、全集8、四頁）は、明治五年四月～六月の頃（在郷時代）に創作されたと推定出来る。慧雲にとっては言わば習作時代に属するものであるが、ここには客との対話という形式を採用しつつ当時の慧雲自身の関心が述されている。そこに窺えるものは、文明開化の中心地「東京」に出て「才能」を磨きたいという願いと、その願いの叶わぬ現実との狭間での煩悶、心理的相剋の影である。これについても英学志向の芽生えと絡ませて詳細に検証してみたいが、後考（「慧雲の京都学林遊学時代」）に譲る。

（45）西島醇『儒林源流』七八頁。

（46）『止舟齋文稿鈔』『止舟齋詩鈔』。

（47）「迂言の学制」中島市三郎『教聖・広瀬淡窓の研究』所収、二一九頁。

（48）同前、二二〇頁。

（49）同前、二二〇～二二一頁。